

学校における働き方改革に寄与し，教師集団の同僚性を構築する
校内研修の在り方に関する研究
～PDCA サイクルを回した 2 年間の研修係の取組を通して～

曾於市立末吉中学校 教諭 天野 慎也

目 次

1	主題設定の理由.....	1
2	研究の仮説及び構想.....	1
	(1) 研究の仮説	
	(2) 研究の構想	
3	研究の実際.....	2
	(1) 令和 6 年度校内研修計画の作成と実践	
	(2) 「学習者主体の授業」実現プロジェクト推進ティーチャーの取組	
	(3) 授業を通じた研修の実践	
	(4) 教科指導の目標設定と振り返りの実践	
4	研究の成果と課題.....	8
	(1) 研究の成果	
	(2) 研究の課題	

〔引用・参考文献〕

- | | | | |
|---|----------------------------------|------|---------|
| ・「学校の挑戦－学びの共同体を創る」 | 佐藤学 | 小学館 | 平成 18 年 |
| ・「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」 | 中央教育審議会 | | 平成 31 年 |
| ・『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）」 | 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会 | | 令和 3 年 |
| ・「新版 学校を改革する－学びの共同体の構想と実践」 | 佐藤学 | 岩波書店 | 令和 5 年 |
| ・「学びの羅針盤」 | 鹿児島県教育委員会 | | 令和 6 年 |
| ・『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）」 | 中央教育審議会 | | 令和 6 年 |

1 主題設定の理由（後述の構想図の D1 G1）

筆者は令和5年度に本校に赴任し、研修係を拝命した。曾於市は曾於市グランドデザインで「学びの共同体」の理念¹に基づく授業改善を図ると示している。曾於市教育センター²の研究員を受嘱したこともあり、学びの共同体について学びを深めることにした。佐藤（2006）は、同僚性を築く校内研修の話合いの原則について、「話し合いの対象を『どう教えるべきだったのか』におくのではなく、『子どもがどこで学んでいたのか、どこでつまづいていたのか』の事実におく。」と述べている。このように、子供の学びの事実を基に協議するという考えは、本校が令和5年度にエリア推進スクールとして指定された「コアスクールプロジェクト」³の理念と軌を一にしているため、学びの共同体の理念に基づいた授業改善を校内研修で積極的に進めることにした。佐藤（2006）は、「学びの共同体の学校改革の中心目的の一つは、一人残らず教師が専門家として成長できる学校を築くことにある。この目的を達成するためには、すべての教師が同僚に授業を公開することと、授業協議会を通じて教師が学び合う同僚性を校内に築くことが必要である。」とも述べている。したがって、校内研修を通して教師集団の同僚性を構築したいと考えた。

令和5年度の校内研修計画は前年度のうちに作成されたもので、筆者はその計画に基づいて研修を企画・運営した。令和5年度は学期中に外部講師を招聘する研修が組まれていて、通常業務と同時進行で外部講師の手配や資料の準備等をする必要があり、担当の係や参加者の中には負担に感じる人もいた。学校の働き方改革に寄与できる校内研修の在り方を模索する必要性を感じた。

中教審の審議まとめ（2021）では、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿について、「他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保するなど、協働的な教師の学びも重視される必要がある。」と記されている。校内研修において、教科の枠を超えて学び合う同僚性を構築できるようにするとともに、教科内での対話や振り返りを通して教科の専門性を高め合えるような、多様な学びの場を設定する必要性を感じた。

以上のことから、学校における働き方改革に寄与しつつ、教師集団の同僚性を構築する校内研修の在り方を研究したいと考え本研究主題を設定し、令和5年度から令和6年度の2年間で研修係としてPDCAサイクルを回しながら研究主題に迫っていくことにした。

2 研究の仮説及び構想

(1) 研究の仮説

研究主題に迫るために、次の研究の仮説1，2を立てた。

仮説1	校内研修の回数を精選したり、学期中と長期休業中で研修内容を区別したりすることによって、研修担当者や参加者の負担が減り、研修の効果を高めることができるのではないかな。
仮説2	教科の枠を超えて子供たちの視点から議論し合う授業研究をしたり、教科内で互いに目標設定・実践の振り返りをしたりすることによって、学び合う教師集団の同僚性を構築できるのではないかな。

¹ 「学びの共同体」の理念とは、佐藤学東京大学名誉教授が提唱したもので、「すべての子供の学びの権利を保障し、その学びの質を高める」である。

² 曾於市教育センターは曾於市教育委員会が令和5年度に立ち上げたもので、教員研修を改善するためにシンクタンク機能をもった組織である。県内の市町村で初めて独自のセンターを設置した（令和5年10月16日南日本新聞より）。

³ コアスクールプロジェクトは鹿児島県教育委員会が主催し、教科の枠を超えて教師一人一人が学び合い、子供たちの視点から議論し合う文化を本県の学校に根付かせ、県内の教員の授業力及び児童生徒の学力の向上を目的とした事業である。

(2) 研究の構想

研究の仮説を検証し，研究主題に迫るための研究の構想を図 1 に示す。図 1 の吹き出しの括弧内の数字は，本稿の項番号を示している。

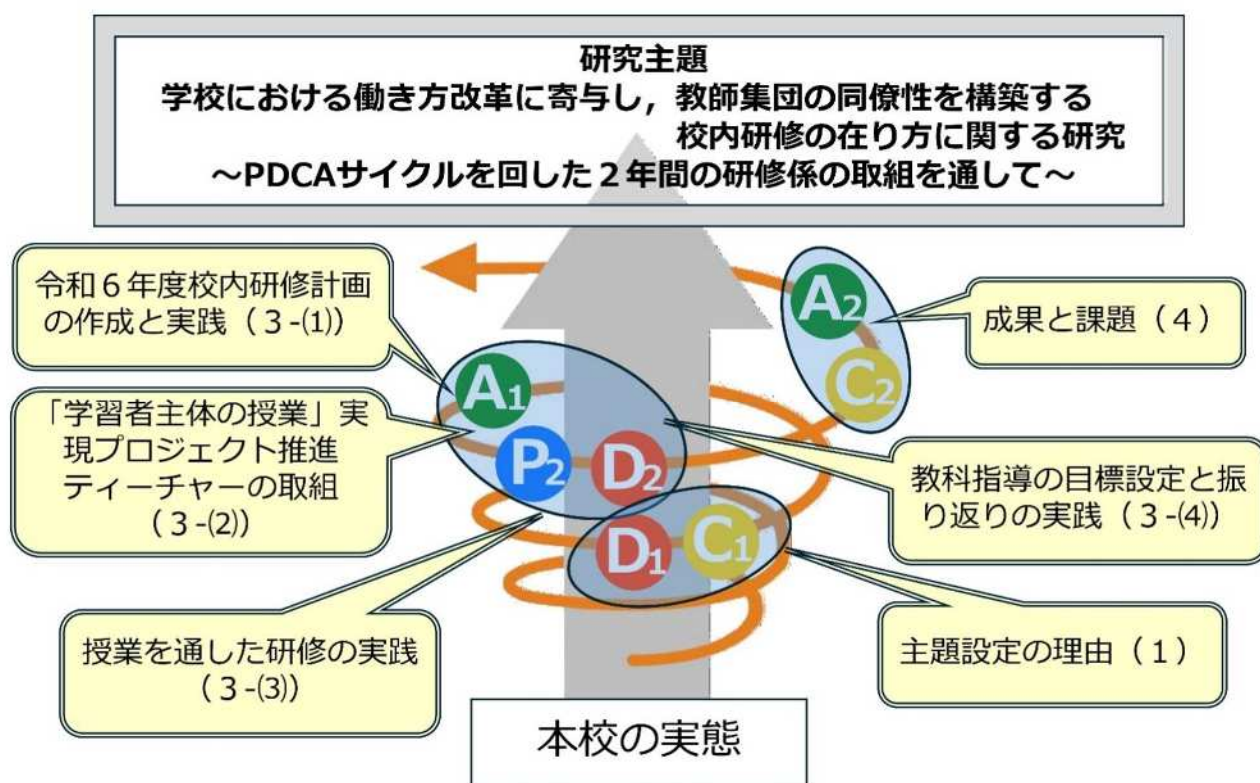


図 1 研究の構想図

3 研究の実際（構想図の A1 P2 D2）

(1) 令和 6 年度校内研修計画の作成と実践

令和 6 年 1 月に教育課程係会があり，令和 6 年度校内研修計画を提案した。計画は次の趣旨で設計した。

- ・ 校内研修の回数を必要最小限に精選し，そのときのニーズに合った研修を追加することができるようにする。
- ・ 年度当初に，研修テーマや教科経営方針，生徒理解などの共通理解の研修を多くする。
- ・ 着任者が働きやすいように，第 1 回の研修では ICT 機器や校内設備の利用の共通理解の場を設定する。
- ・ 学期中は生徒がいないと実施できない授業を通した研修をし，生徒がいなくてもできる研修は長期休業中に実施し，「オンシーズン」と「オフシーズン」に分けて研修内容を配置する。
- ・ 長期休業中は，前学期の教科指導の振り返りと次学期の教科指導の重点を教科ごとに話し合う研修を入れる。

研修係会のとときに，授業を通した研修について，研修方法や実施する最適な回数を検討した。このような手続きを踏んで作成した令和 6 年度校内研修計画が次頁の図 2 である。

令和6年度 末吉中学校校内研修計画

1 本校の教育目標

人間性豊かにたくましく生きる生徒の育成～心に届く挨拶のできる生徒～

2 研修テーマ

子供の学びの事実をもとに、自らの言葉で語り合える教師の同僚性の構築

回	学期	月日(曜日)	研修内容	担当
1	1学期	4月3日(水)	ICT 機器・校内設備の利用の共通理解	PC・タブレット 機器
2		4月15日(月)	年間計画・研修テーマの共通理解 授業を通じた研修の共通理解 教科経営方針の共通理解	研修 教科主任
3		5月13日(月)	生徒理解,人権同和教育 アレルギー・エビペン	生徒指導 栄養教諭
4		5月27日(月)	授業を通じた研修①(授業参観・授業研究)	研修
5		6月14日(金)	授業を通じた研修②(授業参観・授業研究)	研修
6	夏休み	8月22日(木)	特別支援教育,人権同和教育	特別支援教育
7		8月22日(木)	人権同和教育(外部講師)	人権同和教育
8		8月28日(水)	AED・心肺蘇生法研修	養護教諭
9		8月29日(木)	1学期の教科指導の振り返り(NRT,全国学調,体力テストの分析を含む)	研修 教科主任
10	2学期	9月13日(金)	授業を通じた研修③(授業参観・授業研究)	研修
11		12月11日(水)	授業を通じた研修④(授業参観・授業研究)	研修
12	冬休み	1月6日(月)	2学期の教科指導の振り返り	研修 教科主任
13	3学期	3月7日(月)	研修テーマの振り返り 年間の教科指導の振り返り(定着度調査の分析を含む)	研修 教科主任

※ 例年よりも研修回数を減らしているの、そのときのニーズに合った研修を追加することができるようにしている(特に、夏休み,冬休み,3学期に入れやすい)。

図2 令和6年度末吉中学校校内研修計画

(2) 「学習者主体の授業」実現プロジェクト推進ティーチャーの取組

本校は令和6年度,「学習者主体の授業」実現プロジェクト⁴のプロジェクト実践モデル校区に指定され,筆者はプロジェクト推進ティーチャーを拝命した。本校は令和5年度のコアスクールプロジェクトの時から子供たちの視点から議論し合う授業研究を行っていたことと,研究公開(7月9

⁴ 「学習者主体の授業」実現プロジェクトとは,コアスクールプロジェクトの後継事業で,中学校区ごとに指定をし,教科だけでなく小・中の学校種を超えて子供たちの視点から議論し合う文化を本県の学校に根付かせることをねらいとするものである。

日実施)の前に授業を通した研修を2回行ったことから、授業参観や授業研究の方法についてスムーズに共通実践することができた。

本校は本プロジェクトの大隅地区実践モデル校区のため、第1回研修会が大隅地区合同研修会に位置付けられ、大隅地区に指定された5つのプロジェクト実践校区の行政担当者や各校の管理職及び研修担当者が集まり、本校の実践をモデルにして各校区に広げる役割も担う。校内研修に加えて合同研修会の運営業務をする必要もあり、業務の効率化と研修の充実のために以下の工夫を行った。

- ・ 実施計画作成に向けた参加者数及び駐車台数の把握のため、参加申込の案内文を早めに発送した。
- ・ 本校の各係の分担を早めに知らせ、担当者・業務内容・作成資料・スケジュール・締め切りを明確に示した。
- ・ 授業の空き時間で準備を進められるように時間割を考慮して役割分担をした。
- ・ 担任と副担任で業務を分けたり、事務職員などのいわゆる4年部の職員も業務を請け負ってもらったりするなど、全校体制で協働的に準備・運営・片付けを行うようにした。
- ・ 詳細な案内文に交通案内や注意事項なども盛り込むことによって、何度も文書作成や連絡をしなくても済むようにした。

研修会を当初は体育館で対面での実施予定だったが、実施日が暑い季節であり、熱中症対策のために、授業時にタブレットで授業会場と別教室をつないだり、授業研究時に各会場をビデオ会議アプリでつないだりして実施した。結果的に、生徒も参加者も集中できる環境で、対面とオンラインから参観者が選べる個別最適な研修を実現することができた。

プロジェクト推進ティーチャーは実践校区の校内研修のサポートのために実践校区の研修会に参加することになっている。大隅地区は実践校区が5校区あるため、5校の研修会に参加した。研修を充実させるために、以下を留意するとよいことに気付いた。

- ・ 授業研究で話し合うグループのメンバーが、同じ生徒たちを参観するように参加者のグループ編成をして事前説明会等で示すことによって、授業研究時に生徒の見取り方を自分と他者を比較できるようになり、生徒の見取り方がより深まる。
- ・ 中学校が会場校になる場合、小学校の先生が卒業生を参観できるように参加者のグループ編成をすることによって、授業研究時に小学校在籍時の様子と比較して議論することができる。
- ・ 「授業者や生徒の目線や声を遮らないようにすること」や「授業中の生徒への声掛けは必要最小限にすること」など、事前に授業参観時のルールを伝えることによって、授業者や生徒が安心・集中して授業ができる。

(3) 授業を通した研修の実践

本校は令和5年度がコアスクールプロジェクトのエリア推進スクールであり、年間2回のプロジェクトに関する研修会を行った。プロジェクトの趣旨にある、子供たちの視点から議論する授業研究を行うことができたが、この取組を研修会が終われば元に戻るような一過性のものにしてしまっただけでは水泡に帰してしまう。子供たちの視点から議論する文化を本校に根付かせるには、佐藤(2023)が「学びの共同体の学校改革の中心目的の一つは、一人残らず教師が専門家として成長できる学校を築くことにある。この目的を達成するためには、すべての教師が同僚に授業を公開することと、授業協議会を通じて教師が学び合う同僚性を校内に築くことが必要である。」と述べているように、授業を通した研修を定期的の実施する必要があると考えた。

筆者は令和5年度に曾於市教育センター研究員として、先進地派遣研修に参加した。視察した横須賀市立野比中学校は学びの共同体の理念に基づいた学校経営が根付いており、どのクラスでも授業開始時から4人グループで授業が展開されていた。野比中学校の校内研修計画では、年間12回のうち、全職員で授業参観・授業研究をする全体研修が2回、学年ごとに授業参観・授業研究をする学年研修が8回組まれていて、全職員が1年に1回は授業を公開している。学年研修なら授業時数を圧迫し過ぎないので、学年研修の形態を参考にすることにした。また、教科のメンバー同士で授業参観をするようにすると、時間割の組み方が複雑になりすぎるので、学年のメンバー同士で教科の枠を超えて子供たちの視点から議論し合うという目的にした。

研修計画の第1案では、研修を年間で4回組み、各学年を3～4人ずつの3チームに分け、チームのメンバーで授業者と参観者をローテーションし、授業研究をする形態を提案した。しかし、この形態ではどうしても自習が生じてしまうという問題点があった。そこで、改善した研修計画が図3である。

「学習者主体の授業」への改善推進事業における研究授業者一覧（敬称略） 提案：令和6年4月22日 集約：令和6年5月11日 発表：令和6年5月30日

令和6年度 研究授業者

日程	1年部					2年部					3年部				
	研究 授業者	対象 学級	通常 授業者	対象 学級	参観者	研究 授業者	対象 学級	通常 授業者	対象 学級	参観者	研究 授業者	対象 学級	通常 授業者	対象 学級	参観者
①5/27	A	1-1	E D F C	1-2 1-3 1-4 桜1	B G I	K	2-3	J O N H	2-1 2-2 2-4 桜2	L M P Q	T	3-3	V U W R S	3-1 3-2 3-4 桜31 桜32	X Y Z AA AB
②6/14	B	1-4	G F D C	1-1 1-2 1-3 桜1	A E H	L	2-2	P Q K R	2-1 2-3 2-4 桜2	J M N	U	3-2	X O I Y S	3-1 3-3 3-4 桜31 桜32	T V W Z AA
③9/13	C	さくら1	F G H B	1-1 1-2 1-3 1-4	A D E	M	2-1	S L P T	2-2 2-3 2-4 桜2	J K N Q R	O	3-1	I Z X	3-2 3-3 3-4 桜31 桜32	U V W Y AA AB
④12/11	D	1-2	G I J E	1-1 1-3 1-4 桜1	A B C F	N	2-3	Q L M H	2-1 2-2 2-4 桜2	J O P R S	—	—	K AA AB U V	3-1 3-2 3-3 3-4 桜3	—

令和7年度 研究授業者（学年は令和6年度の所属学年で示すものとする）

1年部	2年部	3年部
F G	R S	W

令和8年度 研究授業者（学年は令和6年度の所属学年で示すものとする）

1年部	2年部	3年部
E I	J P	V X Y Z

初任校研修等の各種
研修を別日程で実施す
る人は除いてある。

図3 令和6年度末吉中学校 授業を通した研修計画

研修を年間で4回組み、研究授業以外の学級は通常授業を行い、授業がない職員が研究授業を参観する形態にすることで、自習が発生しないようにした。授業研究は通常授業をしていた職員も加わり、学年ごとに実施する。また、令和6年度に授業をしない職員は令和7年度もしくは8年度のどちらで行うかを令和6年度のうちに集約をした。このようにすることで、3年間で1回は研究授業をすることになるため、「学習者主体の授業」への改善推進事業の取組を達成することができる。

そして、次頁の図4に示した授業を通した研修の学習指導案書式のとおり、書式を簡素化・焦点化したり、書き方の例を示したりした。また、この書式をビデオ会議アプリのTeamsにアップロー

ドしておくことによって時間・空間に制約されず、いつでも、どこでも作成にとりかかることができるようにした。このようにすることによって、より短い勤務で成果を維持・向上することを目的とする働き方改革に寄与できると考えた。

「学習者主体」の授業の姿 ・ 一斉（同時に）・一律（同じ方法）・一方向（教師主導）の授業からの脱却 ・ 「生徒が自ら問いを発見する」「生徒が解決の方法を見通す」「生徒が解決まで試行錯誤を繰り返し、協働する」「生徒が自らの学びを振り返り、次に生かす」という子供が主語の授業 ・ 子供の頭の中が「ぐるぐる働きっぱなし」の授業	令和6年8月21日 運営委員会提案 理 科 学 習 指 導 案 Teams で word 版も配布済み 日 時 令和6年1月22日（月）第5校時 場 所 第1理科室 対 象 2年2組 計35名 指導者 教諭 天野 慎也
1 単元名 電流（内容のまとめり 電流とその利用）	他教科の先生は教科書を持っていないので、学習指導要領の言葉で表記してください。
2 本時の目標 直列回路や並列回路の回路全体の抵抗の大きさと各部分の抵抗の大きさとの関係を見いだして理解する。	
3 学習指導要領との関連 本授業は、中学校学習指導要領解説理科編 40 ページの(3)(7)④「電流・電圧と抵抗について」と関連がある。また、指導に当たっては、42 ページの内容に留意したい。	4 が書きづらいという意見がありましたので、①・②の項目に沿ってお書きください。
4 本授業における「学習者主体の授業」についての授業者の捉えとその具体 ①本授業で目指す「学習者主体の授業」の生徒の姿はどのような姿が想定されるか？ 直列回路や並列回路の回路全体の抵抗の大きさと各部分の抵抗との関係を考察するとき、直列回路は実験の結果から生徒は和に等しいことをすぐに見いだすが、並列回路は実験の結果からほとんどの生徒はひとつひとつの抵抗の大きさよりも小さくなることを見いだすことができない。多くの場合、並列回路のきまりは教え込むことが多いが、<u>本授業では生徒自身が並列回路のきまりも見いだして納得のいく理解をさせたい。</u> ②本授業で「学習者主体の授業」を実現するために授業者が工夫したことは何か？ 班員と協働しながら教科書や抵抗の実物、端末など、<u>自分に合った方法で調べられるように授業を展開する。</u>また、回路全体の抵抗の大きさと各部分の抵抗との関係を<u>身の周りのものに喩えさせるジャンプ課題に取り組ませる。</u>	
本時の授業で、「学習者主体の授業」にするために工夫したことについて、授業者自身の考え方（学習者主体の授業の捉え方）と、それを実現するためにどのような活動や手立てをするのか具体的に書いてください。学習者主体の授業にすることが目的なので、学びの共同体の授業でなくてもかまいません。	
5 前後の主な学習活動 前時：抵抗器2個を直列や並列につないだときの回路全体の抵抗の大きさを求めるため、回路全体の電圧及び電流の大きさを調べる。 次時：教科書やワークの問題について、既習事項の回路の性質を使って直列回路や並列回路の電流・電圧・抵抗の大きさを求める。	
6 見取って欲しいこと（なくてもよい） ・ ○○○	本時とのつながりが分かるように、前時と次時の主な学習活動を書いてください。
見取って欲しいことに書くことの例 ① ○○の活動のときに、生徒がどのようなつまづきをしているか。（学習者の学び） ② 生徒がどの場面からついていけなくなっていたか。（学習者の学び） ③ ○○の手立ては有効だったか。（教師の指導法、教材の有効性） ④ ○○のときの発問は有効だったか。（教師の指導法）	

図4 授業を通した研修の学習指導案書式

授業を通した研修が実施される前の職員研修及び職員会議において、研究授業・授業参観・授業研究の進め方を示し共通理解を図った。共通理解事項の概要は次のとおりである。

- 研究授業について
 - ・ 「学習者主体の授業」が目指す授業像
 - ・ 学びの共同体の理念
 - ・ 学習指導案の書き方や配布の仕方
- 授業参観について
 - ・ 参観者どうしで見取る生徒もしくは班の分担
 - ・ 事実の記録の仕方
 - 事実の記録とは、「その観察記録を読んだ人がその姿を再現したときにブレが生じないもの」である。事実と解釈を混同しないように留意する。
 - ・ 参観時の注意事項など（ICT 機器で撮影したデータの取扱い、授業者や生徒の目線や声を遮らない、授業中の生徒への声掛けは必要最小限にすること）
- 授業研究について
 - ・ 授業者の振り返りで話す項目の例（授業づくりで工夫したこと、授業を終えての成果と課題、参観者から聞きたいこと）
 - ・ 「参観者の報告」の流れ（まず1人目の参観者が、記録した事実について、「どの場面で、どのような様子だったのか」を報告する。次に報告した事実に対して、その事実から自分は何を感じたか（考えたか）、その生徒は何をしたいと思ったかなど、自分自身の言葉で語る。2人目以降、1人目と同様に行く。）
 - ・ 気になる生徒への手立て（気になる生徒について、その生徒の気持ちになりきって、どのような手立てを取ればよいか考える。明日からすぐに自分の学級・授業で取り組める「短期的な手立て」と、学年もしくは学校全体で長期的・組織的に取り組むべき「長期的な手立て」の2種類の手立てを考える。）
 - ・ 「学年の目指す生徒像と重点テーマの設定」の流れ（まず、学校経営目標を踏まえて、「学年の生徒が今年度の3月にどのような姿になってほしいか（学年の目指す生徒像）」を話し合って決める。次に、「学年の目指す生徒像」に対して、現在の実態（強みや課題など）を確認する。そして、「学年の目指す生徒像」を達成するために、各教科で共通して育成する重点的な資質・能力（重点テーマ）を話し合って決める。）
 - ・ 授業研究での注意事項（絶対に授業者を批判しない。授業者の思いに寄り添い、自らの指導法改善や本校の生徒の成長のために協議すること。代案や改善策を出すことに努める。）

なお、ICT 機器を活用し、授業研究時に大型テレビに協議の記録を示して視覚化を図ること、Teams にアップロードしておいた授業研究の記録シートに直接入力することで同時編集を可能にすると、授業研究後に Teams の記録シートを印刷・回覧することで他学年の協議内容も即時に情報共有できるようにした。

(4) 教科指導の目標設定と振り返りの実践

中教審答申（2024）では、教師を取り巻く環境整備の目的について、「高度専門職である教師が、働き方改革により創出した時間も活用しつつ、教職生涯を通じて新しい知識・技能等を学び続け資質能力の向上を図り、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たすことが重要である。」と記されている。高度専門職である教師の資質能力を向上させるには、教科の枠を超えて学び合う同僚性の構築だけでは不十分だと考えた。中学校は教科の専門家としての資質能力の向上も必要であり、教科の専門性は同じ教科の教師どうしの語り合いでないと深い学びにつながらない考える。

そこで、校内研修に教科で議論する場を定期的に設定することにした。具体的には、次のとおりに設定した。

回	日付	研修内容
2	4月15日 (年度当初)	教育課程を活用した教科経営方針の確認と共有
9	8月29日 (夏季休業中)	- 担当クラスの生徒の様子との共有（NRTや全国学調などの各種調査の分析資料の活用） - 教科経営方針の1学期の取組状況の確認 2学期の教科指導の重点事項の設定 - 日頃の教科指導で悩んでいることや困っていることの共有
12	1月6日 (冬季休業中)	2学期の教科指導の重点事項の振り返り 3学期の教科指導の重点事項の設定 - 日頃の教科指導で悩んでいることや困っていることの共有
13	3月7日 (年度末)	- 担当クラスの生徒の様子との共有（鹿児島学力・学習状況調査の分析資料の活用） - 年間の教科指導の振り返り - 来年度の教科指導の目標の設定 - 日頃の教科指導で悩んでいることや困っていることの共有

8月29日の第9回は台風のため対面での実施は中止になった。学校行事が多い2学期では別日程の設定が難しかったため、各自でデータに入力してもらい、後日回覧するという書面研修で代替した。第9回が台風で中止となり、本稿の執筆が第12回研修前のため、この取組に対する職員の反応を得られていないため、学び合う教師集団の同僚性の構築にどの程度貢献できたかは定かではない。しかし、本校は全体職員室で学年ごとにデスクが配置されているため、学年内の情報交換は活発な一方で、教科ごとの対話の時間はあまり多くない。この取組のように意図的に教科内で互いに目標設定・実践の振り返りをする場を設定することは、教科の専門家としての資質能力を向上するために重要であると考え、今後実施する第12回・13回の研修も、職員の資質能力の向上につながり、生徒の学びが豊かになるように企画・運営していきたい。

4 研究の成果と課題（構想図のC2 A2）

本校職員へ校内研修の振り返りアンケートを実施した（令和6年12月）。設問は「授業を通じた研修で学んだことや身に付けたことは何か。」「今年度の職員研修の感想はどうか。」である。そのアンケートの回答及び筆者の本研究の振り返りから成果と課題をまとめる。

(1) 研究の成果

アンケートでは以下の回答があった。

- 生徒の視点、生徒の授業中の取組を観察することができた。どの授業でも支援が必要な生徒は同じことが多いので、授業での声掛けの工夫の仕方を学んだ。
- 授業参観をしようと思いつつも、普段は業務を優先してできていないので、授業参観の機会は必要だと思う。

- ・ 自分自身の意識を再確認・改善したり，自分の指導を見つめ直したりするためにも，授業参観は絶対にした方がいいと思う。
- ・ 学習指導案の書式や書き方が示されたり項目が簡素化されたりしたので，授業準備の負担が減った。
- ・ 授業参観をして他の先生方の指導技術を真似させてもらうこともあった。教科は違って自分の教科に生かせるものがあった。
- ・ 生徒の困り感を把握し，気になる生徒を支援するにはどうしたらよいかという視点で授業参観・授業研究をするのが勉強になった。
- ・ 授業研究で手立てを話し合っていると，生徒の姿勢をよくさせるなど，基本的な学習習慣の大切さなどに行きついて，基本的な指導の大切さを再認識した。
- ・ 授業研究で話し合うことで，職員間で共通理解をすることができた。
- ・ 他教科での生徒の学ぶ姿を参観し，生徒理解が深まった。

以上のことから，教科の枠を超えて子供たちの視点から議論し合い，学び合う教師集団の同僚性を高めることができた。また，授業者の授業準備の負担軽減や研修の充足感の実感につながられた。そして，研修の回数が減ったり，長期休業期間に集中させたりしたことによって，外部講師を手配したり，資料の準備をしたりするゆとりが生まれ，一つ一つの研修をより充実させることができた。さらに，研修の参加者は以前よりも自分事として研修に参加している様子が見られた。これらのことから，研究の仮説 1，2 は有効であると考えられる。

(2) 研究の課題

- ・ 授業を通した研修を実施するにあたって，校内研修当日に授業を行うために時間割の変更が必要になり，授業者や教務に負担があった。そこで，来年度は研究授業を校内研修の前日等にも設定できるようにするなどの工夫ができないか考えていきたい。
- ・ 授業研究で考えた手立てを共通理解することができたが，共通実践までは十分至っていなかった。そこで，来年度は共通実践事項を見える化するなど，職員の意識や意欲を高める工夫ができないか考えたい。